

地域で違う赤い実の仲間

赤い実調べの地域別の結果をここでは関東地方についてのみグラフにしましたが、地域別にまとめてみると、北海道では、ナナカマド・ニシキギ類・イチイが身近な林の代表的な赤い実でした。東北地方になると、ガマズミ類・ニシキギ類・ノイバラ類が多くなり、ツルリンドウも目立ちます。北海道も東北地方も林のタイプによる樹種の違いはほとんど見られず、どの林も同じような種構成でした。

関東地方ではほとんどの林のタイプでカラスウリがもっとも多く、シロダモ・アオキ・ヤブコウジも比較的多く見られる赤い実です。また、屋敷林・社寺林ではナンテン・マンリョウなども多く見られましたが、他のタイプの林にはほとんど出てこないのが、人によって植られてきたものと考えられます。公園林にはガマズミ・ゴズイ・サルトリイバラが多く、これらは自然がより豊かな林でもよく見られる植物なので、鳥などによって種子が運ばれ、自然に増えたものと推測されます。ピラカンサやハナミズキなど栽培種が公園林で多いのも関東地方の特色です（下図を参照）

中部地方・近畿地方では、クロガネモチ・ソヨゴといったモチノキ科の樹木が増えます。これらはアラカシ林にもともと多い樹木です。屋敷林・社寺林にはクロガネモチのほか、

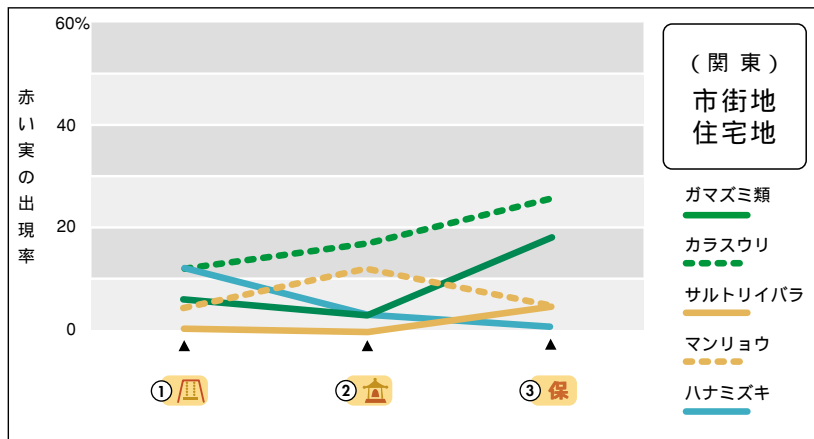
ナンテン・マンリョウ・ヤブコウジ・センリョウ・サンゴジュなどが多く見られました。近畿地方ではソヨゴ・ノイバラ類・ガマズミ類などがより自然が豊かな林に多く、公園林にはクロガネモチ・ソヨゴ・ナンテンなど、屋敷林・社寺林にはカナメモチやマンリョウが加わります。

中国・四国・九州・沖縄地方では、林のタイプによる種構成の相違はあまりなく、ガマズミ類に並んでヤブコウジ・フユイチゴ類・ナンテンなどが身近な赤い実であるといえます。

林のタイプと赤い実の種構成の違いから、本州の林を例に相互の関係を読み取ると、公園林では、クロガネモチやハナミズキなどの高木が植えられ、周囲の保存緑地や斜面林・山地林からは林縁性のガマズミなどの低木や草が入りこんで共存しています。また、屋敷林・社寺林ではシイやカシなどの常緑樹の下で、ナンテンやマンリョウなどの林床性の低木が育てられ、周辺からシロダモやヤブコウジ・アオキなどが入りこんでいると推測できます。

このように、身近な林を多様なものとし、また維持しているのは、ここをすみかとする野鳥の働きが大きいと思われる。たとえば、ヒヨドリはアオキ・ノイバラ・カラスウリ・ガマズミなど、ツグミはツルウメモドキ・ノイバラ・サルトリイバラ・ガマズミなどを食べるということが知られています。このような野鳥が盛んに種子を散布しているのでしょう。

林のタイプ別にみた赤い実の状況 (関東)



- ① 市街地・住宅地の公園林
- ② 市街地・住宅地の屋敷林・社寺林
- ③ 市街地・住宅地の保存緑地・斜面林
- ④ 農村の公園林
- ⑤ 農村の屋敷林・社寺林
- ⑥ 農村の保存緑地・斜面林
- ⑦ 農村の山地林

